J. S.ミルの成長理論と国際調和への発展的プロセス（下）

―― 人生の相対的価値規準と絶対的価値規準に依拠して ――

前　原　正　美

V　神が定めた人生の一般法則とその現代的意義

以上のように神の法則は存在する。そしてそれによって以下のことが明らかになる。

① 第一に，神には意思があり，その神の意思は，人間の生命を世のために生かしたい，ということである。

人間の生命とは，ひとえに自分本来の個性＝潜在的自己能力であり，たれしも人はその意味での生命を発見すれば，天才になれる。その結果，たれしも人は他人にはできないオリジナルな仕事ができるようになるのである。そうしてはじめて人は，自分本来の生き方ができるのである。

そのためには目標がいる。人生の目標とは，自分のために生きること，具体的には自己の望みを叶えることである。

たれしも人は，人生の出発点である20才前後までの時期においては，明確な人生の目標を見いだして，自分の生命を自分のために使い，自分を信じてやり抜けば，必ず望みは叶うのである。それは神が無限の愛なる存在だからである。

だから人は，自分の望みはあきらめずに努力すれば必ず叶う，と信じてよい。

② 第二に，神は30歳前後を人生のターニングポイントと見定めている，ということである。

したがって人は，20代の時期までは，自分のことだけを考えて生きてよい。つまり人は，何よりもまず自分自身を大切にすること，常に自分の人生に希望を持って生きてゆく，ということが大事である。

なぜなら望みは，自分を識る手がかりだからである。

たとえば歌手になる望みを持つ者は，歌手になりたい自分を識る。それが最初の自分を識る手がかりとなる。ましてや自分の望みが叶うと，たれであれ人は，自分に自信を持てるよ

うになり，自分を愛するようになる。

さらにはまた望みが叶うと，たれしも人は，自分を創造する喜び，新たな自分をつくりだす喜びが生まれる。

そうして人は，自己肯定，自己愛の認識に至るのである。

③　第三に，自分の考えたことは神の考えたことであり，神が考えたことは自分が考えたこと，と考えてよい，ということである。

要するに人は，自分の心に素直に生きてゆくことが大事である。

人間の心には良心がある。良心，つまり神の無限の愛の心は，常に人間を幸福へと導いてゆく。だから自分の心から湧きあがる考えは，神の与えた考えである，と考えてよい。

それゆえ人は，自分がひとまず決したことは，あきらめずにやり続ければ，必ずその目標を成就することができるのである。

何かをなそうとすれば，必ず困難が生じる。それは人間の能力を引きだすためである。

たとえば人がひとつの的（まと）をねらって弓を射るばあい，的が目標である。そして弓を射る時，弦を強く引くことが人間の努力である。弦は的とは反対側に反るが，力一杯，弦をひいて，もうだめだ，とおもうぎりぎりのところで手を放すと，弓矢は力強く的を射る。つまり弓は，目標と反対の方向に大きく引かれるほど，かえって逆に力強い勢いで的に的中するのである。

このことは，困難が大きいほど，かえって逆に著しく人の自己能力が引きだされて人生が飛躍的に進展することを物語る。

要するに人は，自分の望み＝目標を叶えようと努力するプロセスの中で，必ず反対の出来事に遭遇する。それは神が，人間の意思を確かめ，その能力を引きだすためである。

④　そして第四に，たれしも人は，神の意思によって生かされているかぎり何があっても大丈夫である，ということである。

人間は，たとえいかなる試練に直面しても，生命あるかぎりは大丈夫である。試練は，人間が成長し愛の心を深く培うために神が与えたものである。神は人間一人ひとりを愛しているがゆえに，時に人間に試練を与え，それによって人間の個性＝自己能力を鍛えあげ，大きく引きだしてゆくのである。

したがって人は，いついかなるばあいにもけっして否定的な考えを持ったり，マイナス思考に陥ってはならないのである。

さらにはまた神が人間を生かしているとすれば，人間は自らの意思を神の意思に重ねあわせてゆきさえすれば，たとえば病気になったり事故に遭ったりというように，余計な経験をする必要がないのである。

⑤　第五に，すべての事実は必然であり世に偶然は存在しない，ということである。

神はすべての人間が幸福になるために，良心という形で人間一人ひとりの心のなかに存在し，常に人間一人ひとりを導いている。それゆえ神は，人間一人ひとりにもっともふさわしい事実や出逢いを与え，すべての人間が幸福になるように導いているのである。

このことは，神が人間に生存条件それ自体を与えていることを意味する。

人間がいかに自分で生きようとおもっても，生かされなくなったら生命を召し上げられる。逆にいくら自分が死のうと思っても，神が生きよ，といえば死ぬことはできない。

たとえば西郷隆盛は，島津斉彬の急死によって絶望し，月照とともに薩摩の錦江湾に身を投げて入水自殺をはかったが，月照の生命は召され，西郷だけが浜に打ちあげられて生命を生かされたのである。

このように神は，人が自らに与えられた使命を果たすまでは，たとえその人が死のうとしてもその生命を生かしつづけるのである。

明らかに神は，すべての人間に，生まれ故郷，学校といった環境，そこで出逢う人びと，生きる時代，働く場所，つまりは人間の生存条件それ自体を与えているのである。

⑥　第六に，神は，社会の意識を向上せしめ，時代を愛の時代へと導いている，ということである。

神がすべての人間に対して課している人生の目的は，人間的完成である。医学や科学技術の進歩は人間の英知の賜物ではあるが，しかしそうした人間の英知の賜物も使い方を間違えれば，かえって社会に害を与えることとなる。したがって自己能力の向上が人格の向上に結実することが重要になってくる。

なるほど神は，人間が他者に対する愛を見失っている時，自分と同等に他者を愛する心に目覚めさせるために，時に大きな試練を与える。しかしひとたび人間が愛の心に目覚めれば，病気にせよ，困難や災難でさえも，簡単に自分のもとを逃げ去ってしまう。そうした事実によって神は，自分の心は自分に返る，人に尽くせば自分もそれだけよくなる，ということを人の眼に見えるように世に示してゆくのである。

したがって人は，常に他者には真心をもって尽くすこと，他者には親切とおもいやりを持って接すること，いいかえれば自らの愛を世に施すことが自らの生命を生かすということを認識・自覚しつつ，生きてゆかなければならないのである。

すべての人間にとって，隣人愛＝人間愛こそが，人間相互間の生命の尊厳であり，人間相互間の存在価値の尊厳であり，自分と同等に他者を愛する心こそが，人と人との信頼関係を生みだし，愛に満ちた社会，したがってまた愛の時代をつくりだしてゆくのである。

いいかえれば人間相互間の是認の感情の高揚＝社会全体の意識の高揚＝社会的共感の質が

高まれば，人間は皆，他者の愛に触れて自らの愛を深く培い，神に与えられた使命を発見し，その使命を果たしてゆくことによって世に感動を与えてゆく存在となるのである。

そうして社会全体の意識が高まれば，おのずと社会の大多数の割合を占める労働者全体の意識もまた高まり，自らの愛に目覚めた人びとの自由意思によって愛の時代は到来しうるのである。

〔1〕　神の定めた人生の一般法則と現代

〔1〕—(1) 神が定めた人生の一般法則と現代

第三に，神の定めた法則は「神の無限の愛の法則」として作用してゆく。それは，自らのかぎりない愛を自らの存在それ自体において世に伝えてゆくプロセスである[1]。

1　神の意思は天才による社会変革にある

社会とは，人間がつくりだす組織（システム）である。その社会を時代の要請するあるべき姿に導いてゆくためには，全体を見わたせる指導者の存在が必要である。社会全体を指導しうる存在は天才であり，天才こそは人間本来の生き方，つまりは神の真理を伝えてゆく者であり，社会変革の担い手である。

いつの時代にも天才は存在していた。しかし人間の意識，つまり一般大衆の心が未成熟で，大衆と天才との意識の開きがあった時代には，天才たちは常に迫害を受けてきた。それでもなお天才たちは，時代の抑圧に屈せず自らを貫いてきた。たとえばイエス・キリストを見れば，このことは明らかである。

神にすれば人間は皆，神自身の子供である。そしてまたすべての人間が天才になりうる可能性を持っている以上，つまり自分にしかない自分本来の個性＝潜在的自己能力を持っている以上，人間は皆，はじめから平等である。

天才とは，神に与えられた使命を発見しえた者のことを意味する。

天才は神の意思がわかるから（なぜなら良心に従える人間だから），いかなる迫害を受けても神とともに生きてゆけるのであり，圧政者に屈せず神の意思＝絶対的価値規準に従って，つまりは良心に従って自らを貫いてゆくことができるのである。

たとえばローマ皇帝は，相対的価値規準に従って生きる者であったため，神の意思を理解できず，イエスの存在を受け入れることができなかった。貧しき大衆はなおさらであった。

そのために歴史上，イエスをはじめとする天才たちは，十字架にかけられてきたのだ。

だが幾多の時代を経て，いまや最先進国，いわゆる資本主義社会（たとえば日本）は，戦争という破壊の時代を超えて，すべての人間が自由に利己心を発揮しうる社会を構築しえ

た。いいかえれば今日の時代では大衆は，利己心を追求しうる自由を手に入れることによって，自らの個性＝自己能力と他者に対する共感能力を著しく高め，天才を受け入れられるようになったのである。そして時代は大衆の能力を必要とするようになり，そのために才能の傑出した天才の登場を受け入れられる社会的基盤が整い、イエスという大天才に対してさえ共感しうる能力を育成しつつあるのである。

人類のエネルギーが――かつては戦争における努力に使用されていたが，――いまは富を獲得するための努力に使用されているということ，しかもそのような状態が，よりすぐれた精神を持つ人びとが他の人たちを教育してよりよき状態へ移らせることに成功するまで続くということは，人類のエネルギーがよどむよりも，疑いもなくはるかに結構なことである（〔1〕『経済学原理』Ⅲ　p. 755，④106頁）[2]。

いまや人びとの生活水準は著しく高まり，大衆全体の生活は経済的に豊かになった。さらには資本蓄積が進み，人口増加率は減少し，供給が需要を上まわるようになった。このような社会においては，良質でかつ廉価な製品をつくりあげることが，社会的要請となった。つまり従来よりも少ない労働力（労働者数）で，従来と同じか，またはそれ以上の商品やサービスを提供していかなければならなくなった。

こうして最先進国には，能力主義の時代が到来した。

このことは，神が人間の才能を引きだしてゆくように時代それ自体を導いている，ということを意味する。

たれしも人は，社会という枠組みのなかで生きている。そのかぎり人は，社会的規範に則して生きてゆかねばならない。

社会的規範とは，社会の大多数の人びとが是認した社会的価値規準であり，社会を構成する見知らぬ他者が互いに生きてゆくうえでのあるべき倫理規準である。一言でいえばそれは，社会が定めた社会的正義に他ならない。

したがって社会的規範＝社会的正義は，社会における世論によって支えられているのであり，それゆえ大衆の共感によって支えられているのである。

だが重要な問題は，大衆の共感の水準である。

ここで道徳の規準を定義すれば，人間行為のための準則であり教訓であって，これに従えば，先に述べたような生存が，最大可能の範囲で全人類に保障されるものである，といえよう（〔3〕『功利主義論』472頁）。

現代においては，資本蓄積の著しい進展に伴って，かえって大衆の個性が社会の一般常識のなかに埋没してしまった，という意味において，まだまだ大衆の共感能力の水準はきわめて低い，といっても過言ではない。

今日の是認〔共感〕の規準は，……より劣った者の模倣を生む，という点に見定められている（〔2〕『自由論』295頁）。

周知のように戦後日本は，人びとが自らの利己心を追求した結果，高度経済成長を遂げ，社会全体の生活水準を押し上げた。

なるほどこのことは，大衆の暮らしを経済的に豊かにした。しかしその一方では，大衆の個性を画一化した。

相対的にいえば大多数の人びとは，いまでは他者と同じものを読み，同じものを聞き，同じものを見，同じ場所にゆき，同じ対象に希望と不安をむけ，同じ権利と自由を持ち，自らの権利を主張する同じ手段を持っている。まだ残っている地位の相違は大きいけれども，その相違は過去の時代と比べれば，無に等しい。そして大衆の個性の同化はなおも進行中である（〔2〕『自由論』299頁）。

要するに大多数の人びとは，他人と同じような自分であることが望ましい，と考えるようになった。いいかえれば大衆は，自らの個性を喪失し，自分自身を見失っているのである。

それはなぜかといえば，大多数の人びとは現状に満足しているがためである。そうした人間は，ただたんに低俗な快楽を求めて生きているにすぎない。

現状に満足を求めてしまえば，人間の成長はそこでとまる。それどころか堕落への道を転がり落ちることになる。

人間性と人間生活を向上させるために行われている努力……をほんの少しでもゆるめたならば，人間的改善は終止符を打つだけではなく，一般にはとめどもない堕落の方向にむかうであろう。そして堕落がひとたび始まったならば，その人間の堕落は加速度的に大きくなって，ますます阻止しがたくなるだろう。その結果，ついには堕落した人間は，歴史上しばしば見られ，現在でさえ人類の多くの部分がそのもとに呻吟しているような，みじめな状態に陥ってしまうであろう。そうなったならば，いかなる人間であれ，超人的な力をもってしなければ，潮を逆流させて向上の流れに戻るための新たな意識を与えることはできないであろ

う（〔4〕『代議政治論』373頁）。

今日の時代では，何もしないことがよいことである，という世論が社会を支配する。そのために大衆の共感能力の水準はまだまだきわめて低いのである。

大衆の……共感の規準は，何も望まない，ということに定められる（〔2〕『自由論』295頁）。

大多数の人びとの仕事は，決まりきった労働の繰り返しになってしまっているが，現代社会の大きな問題は，経済的な豊かさのために，かえって仕事に無関心な人間を数多くつくりだしてしまった，というところにある。

さらに重要な問題は，大衆の共感能力の水準が低いということのために天才の活躍を妨げてしまっている，という点にある。

一般的なありふれた人間は，知性の点で普通並みであるのみならず，その精神的傾向も普通並みである。かれらは，何か並みはずれたことをしたいという気になるほど，強烈な好みや願望を持っていない。したがってかれらは，強烈な好みや願望を持つ人びとを理解せず，そのような優れた人びとのすべてを，かれらが日頃，軽蔑している粗野で慎みのない人びとと同じ部類に入れてしまうのである（〔2〕『自由論』294頁）。

世論の専制は，奇矯さを非難の的とするほど非常に激しいものである……ある社会のなかの奇矯さの量は，一般にその社会が含む天才，精神的活力，道徳的勇気の量に比例していた。現在，あえて奇矯であろうとする人びとがこうも少ないことは，現代のもっとも大きな危険を物語るものである（〔2〕『自由論』292頁）。

社会の大多数の割合を占める大衆の意識レベルが低いことは，政治，経済，教育などのさまざまな方面において，きわめて深刻な問題を引き起こしてゆく。

① まず第一に，よい統治の前提条件として，大衆の知的・道徳的資質を向上させること，いいかえれば大衆の意識の向上こそが，よい統治の実現のために不可欠であるが，大衆の意識が低く，知的・道徳的資質が低いがゆえに，大多数の人びとが政治的無関心となれば，民主的な統治制度は機能せず，政治がおかしくなるのは当然のことである。

よい統治が行われる原因と条件のなかで，もっとも中心的で重要なものは，統治の対象であ

る社会を構成している人間の資質である……公正で有能な行政を行うことができる人が官途につく気になれず，私的利益を促進しようとする人びとに国家の職務が任せられているような状態で……どうしてよい都市行政をもたらすことができるだろうか。選挙人がもっとも優れた代議士を選ぶことに関心を持たず，当選するためにもっとも多くの金を使う人を選ぶような状態では，最善の代議制度も何の役に立つであろうか（〔2〕『自由論』374頁）。

大多数の個人が自己主義的な利益を考えるだけで，広範囲な利益に関心を持ったり，自ら進んで社会の一般的利益の増大のために参与しようとしない状態であるばあいには，よい統治の実現は不可能なのである（〔2〕『自由論』374-375頁）。

為政者を選ぶ人びとや，為政者が責任を負っている人びとや，これらのすべての人びとに世論によって影響を与えて牽制する立場にある傍観者たちが，無知で愚かでひどい偏見を持っているようなばあいには，すべての統治機能はうまく作用しないであろう（〔2〕『自由論』374-375頁）。

② 第二に大衆の意識レベルの低さは，一国の経済停滞をもたらすことになる。

社会を支えているのは大衆である。それゆえ大衆の意識レベルが低く，大衆が自分に与えられた仕事に全力を尽くさず，そのために大衆の知的・道徳的水準が低ければ，労働者ひとりあたりの労働能率がきわめて低く，社会全体の生産力が低下してゆくのは，きわめて当然のことである。

③ 第三に大衆の意識レベルの低さは，教育水準を低下せしめ，天才の登場を阻止する。

大衆の意識レベルの低さは，各個人の個性＝自己能力の自由な発揮を是認せず，したがってまた天才の登場を阻止することに結実する。そしてそれは，根本的には教育のあり方にこそ最大の問題があるのである。逆にいえば時代の流れに対応できぬ政治家がつくりだす教育制度こそが，大衆の意識レベルを低下させて，天才の登場を阻止させているのである。

今日のでたらめな教育，でたらめな社会環境こそ，ほとんどすべての人びとがこのような〔天才の活躍を是認しうるような〕共感水準に到達するのを妨げている，ただ一つの真の障害である（〔3〕『功利主義論』474頁）。

2 神は全体の調和を導いてゆく

資本蓄積，円高，デフレ経済社会，人口増加率の減少，土地神話の崩壊，日本式経営（終

身雇用制や年功序列制）の解体といった社会的帰結によって，いまや日本には能力主義の時代が到来した。

こうした時代状況にあって人間は，人生の目標を明確に見定めて努力し，自己能力を最大限に引きだして，本業を貫くしかなくなった。

日本式経営はもはや崩壊した。その結果，現代社会では，大衆が企業に依存する生き方ではなく，お互いに自らの個性＝自己能力を提供しあって，自己向上を目指す共同体組織の自立基盤ができてきている。

他方では円高によるコストダウンによって，途上国へ生産拠点を移転し，途上国の経済成長に貢献しつつ，日本の輸出増大を図ってゆく相互協力の時代にきている。

人間が自分ひとりだけで生きてゆけないように，国家もまた世界のなかで一国のみで生きてはゆけない。このことは，輸出依存型の日本経済の特質を見てみれば明らかであろう。ましてや日本が石油輸入国であることを考えればなおさらである。

3　利己心の時代から公共心の時代（天才が活躍しうる時代）へ

こうして日本をはじめとする資本主義国の成熟に伴い，いまや人びとは，自らの個性＝自己能力を鍛えあげなくてはならない時代となった。

それは歴史的必然であり，いいかえれば利己心の時代を超えて公共心の時代へと神が導いていることを指し示す。

ある意味では，資本主義が高度に成熟すると，大衆の個性の画一化がすすむ。そもそも人間は堕落する傾向がある。しかしその堕落の傾向を，神の意思の反映である時勢が打破してくれる。そこに神の無限の愛があるのだ。

たとえば現代日本では，能力主義の時代の到来によって，いまや大衆は会社にもはや依存できなくなり，自らの個性＝自己能力を鍛えあげてゆかねばならなくなった。このことは，人は自分の人生を自らの力で切り拓いてゆかねばならないことを意味する。

人口が増加している間は，商品への需要が供給を上まわるから，商品は生産すれば売れていた。しかし資本主義の成熟に伴い，生活必需品は社会全体に普及し，また人口増加率の低下によって，市場の商品は供給過剰となり，商品はこれまでどおりには売れなくなってきている。

その結果，利己心の内容が変容する。

たとえば企業は，消費者や顧客のニーズと商品が合致してこそ，あるいは消費者や顧客に満足感を与えられる商品があればこそ，はじめて利益が生じる，という事態に直面している。ここに至っていまや企業は，他者に尽くして自らの利益を得る，という内容の利己心を

発揮せざるをえなくなった。

要するにこれまで企業は，自分自身の利益の増大のために努力すれば，そのことが社会の一般的利益の増大のためにおのずと寄与する，という意味での利己心を発揮してきたが，いまやそうした利己心のあり方では，かえって自己利益の増大を実現できなくなったのであり，自分のためではなく，むしろ社会のために，という社会的貢献を前提とする新たな意味内容の利己心に従って企業活動を行わざるをえなくなってきた。

したがっていまや，社会のニーズに見あった企業それ自体の再編成，社会システムの再編成の時代が到来したといえる。

このことは同時に，私的利益よりも社会的貢献の重要性を公に説いても，それが社会に受け入れられる時代が到来したことを意味する。その意味で，時代はまさに大変革期を迎えた，といえよう。

資本主義が高度に発展した時代，いわゆる高度経済成長期は，商品はつくれば売れる時代であり，そのために企業は消費者のことは現在ほど深く考えていなかった。それゆえこれまでの時代は，企業活動の目的は社会的貢献のためにこそある，という意識が，社会に浸透しえない時代であった。

ところがいまや，社会の構成員，国民全体のために貢献しなければ，企業も社会も成り立たない時代になった。

だからこそいま，天才が社会的貢献を唱えても，社会に受け入れられる時代となったのである。つまり国民が天才の意識についてゆける時代になった。

すでに日本では，教育水準が高まり共感能力が向上しうるだけの経済的基盤が確立しているのであり，その意味では社会は精神的成熟期を迎え，かつての時代とは違って天才が迫害される時代ではなくなった。

それゆえいまや，社会の集合的意識が利己心から公共心へと高まり，大衆と天才が一体感を持てる時代の形成を要請している，といえる。

こうした現実を見れば，明らかに神は，時代それ自体を天才が活躍できる時代へと導いている，といえる。その意味では，すばらしい時代が到来しているのである。

時代はいまや，競争＝利害対立の時代を経て，共存の時代へとむかっている。いいかえれば時代は，利己心の時代から公共心の時代，そして神の無限の愛による全体の調和の時代へとむかっている。

以上のことを，神の視点に立脚して説明してみよう。

① 何よりもまず神は，無限の愛なる存在であるがゆえに，自らの姿を現さずとも，天才が社会の指導者となって，社会変革を行えるように時代を導いている。

したがって天才の使命は，社会の指導者，社会変革の担い手となって社会を導くことにある。それは同時に，天才の使命が神の存在を自らの存在そのもので示すことにあることを意味する。

神は自らを証明しない。しかし天才は，自らのうちに宿る良心＝無限の愛の心を発見しえた者であるがゆえに，絶対的価値規準に従って生きてゆける者である。

さらには神は，神の法則を人間に教えていない。にもかかわらず天才は，人間は皆，たれもが天才になれるのだ，ということを自らの生き方をもって証明できる。いいかえれば天才は，利己心→公共心→神の無限の愛の心への到達という三段階の人間的成長プロセスを経て，たれしも人間は天才になりうる，ということを自らの辿ってきた人生それ自体を世に提示することによって証明できるのである。

そうして天才は，自らの存在それ自体によって，神の存在を世に示すのである。つまり天才は，人間は愛である，ということを自らの人生それ自体で示してゆくのである。

② 社会は人間自身がつくりだすものである。社会システムというものは，人間の意識，つまりは人間の心の反映である。したがって神は，自分自身と心をひとつにする天才がそれぞれの世界で活躍し，その世界の意識変革を行えるように時代を導いてきた。

このことを簡単に示せば，以下のように整理できる。

i 利己心すら発揮しえない時代（封建制社会）

封建時代においては，人間の利己心は抑圧されてきた。しかしそのことが原動力となって明治維新，第二次世界大戦という破壊の時代をつくりだした。

ii 利己心の時代（競争社会）

一言でいえば20世紀という時代は，私的利益の増大を目指すがゆえに，競争＝利害対立の時代であった。いいかえればそれは，他者を踏みつけ踏み倒す勝ち負けの時代であった。

しかしそもそも本来，人生の目的は，人間的完成，つまり自分の人格を最高度に高めることにある。

資本主義が高度に発展した資本主義国家では，すでにそのための政治・経済的基盤は整っている。このことは先に述べたことだが，人口増加率の低下，デフレ経済による商品価格の低下によって，同じ貨幣賃金でも物価が下がれば，労働者の実質賃金は高まり，これまで以上に国民の生活水準は向上しうるのである。

同時にまた日本に代表される資本主義国家＝最先進国においては，生活水準の向上に伴い，教育水準が高まり，したがって知的・道徳的水準も向上し，人間の意識が高まり，共感能力が高まる社会的基盤が形成されつつある状況になっている。

iii　利己心の時代から公共心の時代（競争社会から共存社会）

したがっていまや社会は，人間一人ひとりの個性＝自己能力の向上を求めている。人間一人ひとりが新しい時代のなかで，自らの目標を見いだし個性＝自己能力を高めてゆけば，神に与えられた自らの使命を発見できる。それによって社会には，自らの想いを，したがってまた感動の心を，ひいては自らの愛を広く高く世に伝えてゆくことに，自らの幸福を見いだす者が増えてゆく。となれば天才は数多く登場し，社会の指導者もそれだけ増える。

世の中には，たとえば芸能界，政界，経済界など，人の生きる世界が数多く存在する。そうしたそれぞれの世界を指導する天才たちが数多く登場すれば，社会全体のために，ひいてはまた世界のために貢献する人びとや企業，国家が増えてゆく。

そうして社会は，利己心の時代から公共心の時代へと，いいかえれば競争社会から共存社会へと自然必然的に移行し，世界もまた調和の方向へむかうであろう。

こうして神は，自分自身と一心同体になりうる天才たちの登場を導いているのである。そこに神の無限の愛の心があるのである。

神は，いついかなる時代においても世に天才を登場させ，社会を導いてきたが，幾多の時代を経て，ようやく天才が活躍できる時代がやってきたのである。

しかるに天才の使命はどこにあるのか。以下，簡単に指摘してみる。

① 第一に，天才の使命とは，新たな概念を世に提示することにある。つまり天才の使命は，時代の精神に見あった生き方を提示することによって，社会変革の担い手をつとめることにある。

独創性が人間社会における価値ある要素であることは，たれも否定しない。新しい真理を発見し，かつて真理であったものがもはや真理でなくなる時に，これを指摘するのみならず，新しい習慣を始め，人間生活におけるいっそう啓発された行為と人生におけるより洗練された趣味と感覚の模範をたれる人びと〔天才たち〕が，常に存在しなければならない（〔2〕『自由論』288頁）。

② 第二に，天才の使命は，大衆の啓蒙にある。天才とは，自らの愛を仕事を通じて世に施すことを神に与えられた自らの使命と自覚し，神とともに生きる者である。大衆にとって天才は，無限の愛の心に従って世に自らの愛を施して生きる具体的な見本となる人物であり，人間はたれしも天才になりうる，ということを証明しうる者である。

したがって天才は，人間は皆，自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し，自らの使命を

発見すれば天才になりうるという人間の自然的成長のプロセスを世に示す存在である。

広く公平な心を持っている者は，ほんのわずかしかおらず，社会の調和は敵対する旗のもとに戦う闘士たちのあいだの闘争という荒っぽい過程によって実現されざるをえない（〔2〕『自由論』270頁）。

③　第三に，天才の使命とは，神の存在を自らの存在によって示すことにある。神は自分を証明しない。だが神は，常にあらゆる人間の心のなかに在って，あらゆる人間の人生を経験している。したがって自らの人生に喜びをもって生きる者が増えるほど神の喜びは増すのであり，それゆえに神は，神を手助けする人物，つまりは世に感動を与え，人びとの愛の心をよみがえらせる使命を担う天才の登場を期待しているのである。

もとより人生には，幸福へと辿り着く神の一般的法則が存在する。それゆえに人間は皆，ある一定のプロセスを経て幸福になれる，と決まっている。一言でいえば幸福とは，愛にめぐり逢うということに他ならない。

人間は愛にめぐり逢えぬかぎり，真に幸福にはなれない。そして人間は，幸福になるためにこそ，世に登場してきているのである。

だから幸福になることが人間の使命であり，，自らの幸福を目指すかぎり人は皆，愛に出逢えるのである。

そのことを指し示すのが，天才の使命である。神は自らの存在を証明しないが，しかし神は，天才を世に登場させることで神自身の存在を示す。そのために神は，天才に対して，愛の人となることを使命として与えている。

愛なる人は，見返りを求めず，ただ愛に生きるがゆえに世に感動を与える。天才の登場は，無限の愛の心を自らの人生を通して世に指し示す。そしてひとりでも多くの天才たちの登場によって自己発見する者が増えれば，自らの愛を仕事によって世に施してゆく者，すなわち愛に生きる者が増え，社会の意識の水準がそれだけ高まり，それによって世界は確実に調和へとむかうであろう。

もとより社会は人間がつくりだす。その意味で人間の意識の高さこそが，社会全体の意識を高め，新たなる時代をつくりだしてゆく。その先導者が，天才である。

ゆえに天才は，社会一般の価値観に同調せず，どこまでも神と心をひとつとして自己を貫くことがその使命となるのだ。

〔1〕—(2) 神に与えられた人間の使命と人間の意識

人間は常に意識を持って生きてゆかなければならない。なぜなら常に自分を意識して生きてゆかなければ，人は自分自身が存在する，ということすら認識することができないからである。

あるいはまた人は，自分は一体，何のために世に存在しているのだろう，という問題意識を持って生きてゆかなければ，自らの問題を解決することはできない。

このように考えると意識とは，自分の生きる意味を識ってゆく，ということである。

まさに人生とは，自分という人間の存在価値を認識し，自らの使命を果たしてゆくプロセスなのである。

人間には，それぞれ神に与えられた使命がある。それゆえに自らに課された使命が何であるのかを具体的に発見できれば，たれしも人は，神は常に自らとともにある，という意識を持って生きてゆけるのである。

そのかぎり人は，人生の相対的価値規準を超えて，人生の絶対的価値規準に従って生きてゆけるのであり，つまりは神のかぎりない愛に抱かれて生かされてゆくのである。そのかぎり人はまた，自らの良心＝自らの無限の愛に従って自らを貫いてゆけるのであり，必ずや自らの使命を達成することができる，という明確な意識を持って生きてゆけるのである。

世の中がこれほど不完全であれば，逆説を呈するようだが，意識的に幸福なしでやろうとすることは，人間の力で達成できる幸福を実現してゆくうえで最善の見通しを与えるものだといおう。すでに幸福である者は，幸福ということ自体を望まぬ，という意識を持てばこそ，最悪の事態や不幸でさえも容易に克服できる力を発揮することができる，と世間に感じさせることができるし，また自らの人生それ自体におけるすべてのめぐりあわせを超然たらしめる（〔3〕『功利主義論』477頁）。

神が人間の生命を創造した目的は，すべての人間が幸福になるためにこそ存在する。人間の幸福とは，究極的には自らの愛を自らの仕事を通して世に施してゆくことにある。それは人間の生命の本質が無限の愛そのものであるからである。

したがって人は，神に与えられた自らの使命を発見し，神のかぎりない愛に抱かれて世に生かされている，ということを認識しえてこそ，人生の目的は自己と他者との比較ではなく，自らの意識を最高度に高め，神のかぎりない愛を自らの人生を通じて世に伝えてゆくことにある，という明確な意識を持って生きてゆくことができるのである。

人間の幸福こそ，人びとの行為の唯一の目的であり，幸福の増進はあらゆる人間行動を判断する価値規準となる（〔3〕『功利主義論』501頁）。

人間一人ひとりが神に与えられた自らの使命を発見し，自らの愛を世にかぎりなく伝えてゆくならば，まさにそれは全人類の幸福の実現のために貢献しうる人びとが増えてゆくということであり，それだけ全人類の幸福が達成されてゆく，ということに他ならない。

人間一人ひとりの生命は，けっして自分ひとりのものではない。人間の生命は，全体の幸福，ひいては全人類の幸福のために与えられているのであり，人間は自分のために生命を使用するという意識をはるかに超えて，社会的貢献のため，ひいては全人類の幸福のために自らの生命を使用してゆかなければならないのである。

したがってたれしも人は，その意識に到達するためには，神に与えられた使命を発見しなければならないのである。

人の人生おける完成と美化のために正当に使用されるさまざまな制作品のなかで，もっとも重要な人間の作品は明らかに人間自身〔つまりは自分自身〕である（〔2〕『自由論』282頁）。

すべての人間には神に与えられた使命がある。そしてまた人間は，常に神に与えられた使命を果たしている。なぜならば人間は皆，生きているかぎり何かのために生命を使用しているからである。しかし重要な問題は，自らの使命を意識して生きているか否か，ということである。人間は常に生命を使用しているという意味では，自らの生命を世のために役立てているのであり，そのかぎり現実には神に与えられた使命を果たしているのである。しかし自らの使命を明確に意識していなければ，ただ漠然と無意識に使命を果たしているにすぎず，一体，自分が何のために生きているのか気づかぬままに，ひとつの人生を全うするにすぎないのである。それでは一体，何のために生命を与えられ，そしてまた一体，何のために世に登場してきたのか，わからぬまま世を去ってゆくということになる。となればそれは，無意識のうちにただ神に生かされた人生といわねばならない。

人びとのなかには，何かの動機で始めたどうでもよい多くのことをただ習慣で続けている者があるが，これは無意識による行為である……。そしてまた世の中には，意識的な決意で始めても，その決意が習慣化しており，おそらくは慎重に考慮した選択であろうにもかかわらず，その決意に反して，ただ習慣の力で生かされている者が数多く存在する（〔3〕『功利主義論』502頁）。

大多数の人びとは，現在あるがままの人類の生き方に満足しているために，つまりは自分たちの意識が人類の生き方を現在あるがままの姿にしているために，なぜいまの生き方がすべての人びとにとって十分に善良なものでないのか，ということを理解することができないのである（〔2〕『自由論』280頁）。

生きるとは，生かされて生きる，ということであり，つまりは神の無限の愛に抱かれつつ自らの愛を明確な意識を持って世に施して生きてゆく，ということなのである。それが神に対する感謝の心を形で示すことである，といえるであろう。

たれであれ人は，神に与えられた使命を発見すれば，自らの良心に従って生きてゆくことができる。良心とは，神の無限の愛の心であるとすれば，神に与えられた使命を発見しえた者は，自らの良心＝神の無限の愛の心を発見しえた者であり，そのゆえに人間は常に神の無限の愛に抱かれて生かされて生きているのだ，という意識を持つことができるのである。

いいかえれば神に与えられた使命を発見しえた者は，神と心をひとつにして生きてゆくのであり，そのゆえに神の無限の愛の心を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくことに生命を注いで生きてゆくことになるのである。

したがって神に与えられた使命を発見しえた者は，自らの愛を限りなく世に伝えてゆこうとする者であり，眼の前に与えられた事実や人間のすべてを受け入れてゆく者となる。なぜならこの世のすべての事実や存在は，すべて神が創造したものであり，人間にとって不必要なものはひとつも存在しえず，世に無駄な人間はただのひとりも存在しないと識るからである。

神に与えられた使命を発見しえた者は，自らのうちに宿る良心＝無限の愛の心をある特定のひとりの他者のなかに具体的に発見しえた者である。

たとえば織田信長に自らの良心が照らしだした究極の理想的人物を見いだした者は，自分の生命の本質が織田信長にあることを識り，信長と心を重ねて生きてゆくことになる。まさにそれは，自らの生命の発見であり，自己の発見である。その結果，自分自身の意識を信長の意識まで高める努力を成し，同時にまたそのプロセスのなかで，信長という人物を世に知らしめてゆくことに自らの使命を見いだし，その使命に生命のかぎりを注いでゆくことになる。そして信長という人物が全体の幸福のために生命を注いだということを識れば，自分もまた全体の幸福のため，ひいては人類の幸福のために生命を注いでゆこう，という意識を持って生きてゆくことになる。具体的には，自分の身近な周囲にいる隣人を愛し，さらには自分の住んでいる社会や国家，ひいては全世界の人びとを愛し，できるだけ多くの人びとを受け入れてゆく，という形で自らの愛を広げてゆき，それだけ多くの事実や存在を受け入れ

てゆくように，自らの意識を高めてゆくようになる。

要するに人は，神に与えらた使命を発見し自己の発見＝生命の発見に至るや，自らの良心が照らしだした究極の理想的人物の意識に近づくために，自らの意識を高めてゆくのである。

いいかえれば人間は，神に与えられた使命を発見すれば，自分自身のなかに宿る良心＝無限の愛の心を発見するのであり，その発見によって人間それ自体が善なる存在であり，かつまた無限の愛なる存在である，ということを発見するのであり，そのゆえに自分自身に感動するのである。

したがって神に与えられた使命を発見しえた者は，自らの人生に幸福を見いだし，すでに自分自身が幸福のなかにあるということを意識して生きてゆけるがゆえに，もはや幸福ということ自体を望まぬようになるのである。

このことは考えてみれば，あたりまえのことである。世にすでにあるものを望む者はいまい。しかるにすでに幸福である者が幸福を望むことはないのである。すでに幸福である者は，常に自分自身の人生に感謝して生きる者であり，つまりは自分の生命それ自体に感謝して生きてゆく者であるから，自分自身の幸福それ自体は望まず，むしろ幸福でないと感じる者たちが幸福になれるように，自らの生命を使用してゆくのである。

それゆえ神に与えられた使命を発見しえた者は，当然，高い意識に到達しえた者である。逆にいえば自らの意識を高めてゆかないかぎり，他者に対する高い共感能力を有することができず，自らの良心が照らしだす究極の理想的人物を具体的に発見しえず，神に与えられた使命を発見するに至らないのである。

したがって人間にとって，意識の向上こそが幸福に辿り着く唯一の方法といえる。

考えてもみよ。たとえば信長のように天下人を目指すような人間が隣人を愛さぬはずはない。自らの存在する社会や国家を愛さぬはずはあるまい。かように人間の良心は自分にとっての究極の理想的人物を照らしだすのであり，それゆえに良心が照らしだした他者に共感しえた者は，自らの生命の本質を発見し，同時にまた自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し，その究極の理想的自分自身になるために自分の存在価値を高め，著しく自らの意識を高めて自分自身を最高度の完成作品へと創造してゆくのである。そうして人は，神の意思である最高度の自分自身の創造，いいかえれば不完全な自分からより完全なる自分へと，あるいはまた自分本来の個性＝潜在的自己能力を引きだして神に与えられた才能を広く高く世に生かしてゆく自分自身へと，飛躍的な発展を遂げてゆくのである。

このように神に与えられた使命を果たしてゆくプロセスのなかで，人は自らの仕事を通じて隣人を愛し，したがってまた人間それ自体を愛してゆくのであるが，その最大の成果は，

個人愛とのめぐり逢いであり，つまりは自分と想いを同じくする人物とのめぐり逢いである。

すでに指摘したように使命の発見とは，表現を変えれば想いの発見である。

たとえば信長の人生を著作や映画を通じて世に伝えてゆくことに自らの使命を見いだした者は，信長という人物に熱い想いを寄せる者である。だがそのことは，一般の人には容易には理解されぬであろう。人の想いとは，理屈ではなく，やむにやまれぬ情念である以上，自らと同じ想いを宿す者でなければ理解しえぬものである。しかしそのゆえに，自分と想いを同じくする者には，自分の想いがすぐに伝わることとなる。したがって自らの想いを，自らの仕事を通じて世に示してゆけば，おのずと同じ使命に生きる者同志が出逢うことになる。

何かを成し遂げようとすれば，その仕事が大きければ大きいほど，いいかえれば神に与えられた使命が大きければ大きいほど，自分ひとりの力では成し遂げられない。たとえば信長の人生を映画化するとなれば，多くの人たちの協力が必要となる。

あるいはまた自分が歴史作家であって，自分の原作で映画を制作しその映画を通じて全世界に信長の愛の人生を世に伝えてゆこうとすれば，映画監督や脚本家や役者や，その他多くのスタッフを必要とするであろう。そしてその仕事に従事する中心的存在となる人びとは，自分と同じ想いを有する者となる。でなければ使命は達成されえなくなるであろう。逆にいえば神は，同じ使命を担う者同志の出逢いを与えてゆくのである。

神の視点に立脚すれば，人間は自分が出逢わなければならない人物とは必ず出逢うように配慮されている。人間一人ひとりに神に与えられた使命がある以上，そしてまたその使命を果たしてゆくために自分と想いを同じくする他者の能力が不可欠である以上，たれしも人は出逢わなければならない人物とは必ず出逢うことになる，といいきれるのである。

たとえば織田信長が天下統一という使命を果たすためには，徳川家康や豊臣秀吉や明智光秀といった他者と出逢わなければならず，その出逢いなしに信長は自らの使命を果たすことができなかったのである。となれば信長が世に登場してきた意味はなくなってしまうことになる。

だが現実には，信長は自らの使命を果たしてゆくために必要な人物とは出逢っているのであり，そのゆえに信長は自らの使命を果たすことができたのである。

あるいはまた新たな国家の構築に自らの使命を見いだした西郷隆盛は，島津斉彬や大久保利通と出逢っているのであり，その出逢いがあればこそ，西郷隆盛は自らの使命を果たすことができたのである。

世の中の少数者にすぎぬ天才こそ，地の塩である。これらの天才が登場しなければ，人間の

生活はよどんだ水たまりのようになるであろう。まさにそれは，これまで以前の時代には存在しなかった優れた思考を導入しうるのは天才たちなのだ，ということを示唆するにとどまらない。現在においてすでに存在する優れた人びとの生命をよみがえらせるのもまた，天才の使命なのである（〔2〕『自由論』289頁）。

人間は皆，本来，たれもが天才である。いいかえれば人間は皆，自分自身のなかに自分本来の個性＝潜在的自己能力を宿して世に登場してきているのであり，それゆえに自分自身の生命を発見し，つまりは自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見しさえすれば，たれもが天才となりうるのである。その意味で人間は皆，生まれながらにして平等である。

そして神は，常に人間一人ひとりの心のなかにあって，人間一人ひとりが自らの使命を発見できるように導いているのである。いいかえれば神は，人間一人ひとりの使命から逆算して人間一人ひとりにもっともふさわしい環境を与え，出逢わなければならぬ人物との出逢いを与え，意識の向上に伴って，したがってまた共感能力の向上に伴って，自らの良心が照らしだす究極の理想的人物となる他者に共感しうるように導いてゆくのである。それゆえ自分が生まれた環境，自分が学ぶべき学校，自分が働くべき場所，自分が出逢うべきすべての人物，一言でいえば自分の眼前に現れる事実と人間のすべては，自分が使命を発見しうるために配慮された神の意思の表れといえるのである。

要するにすべての人間にとって，自分の眼の前に現れる事実にせよ人間にせよ，神が与えたもうた必然の結果といえるのである。

それゆえ人は，現在，自分が与えられている環境のなかで，常に全力を尽くして生きてゆきさえすれば，必ず神に与えられた使命を発見できるのである。

そうして人は，神に与えられた自らの使命を発見するに至れば，おのずと自分と想いを同じくする人物との出逢いを与えられ，したがってまた同じ使命を担った人たちとともに自らの生命を使用してゆけるのである。

先に指摘したようにその最大の成果は，個人愛との出逢いである。人間の本質が無限の愛であるかぎり，たれしも人は愛との出逢いを求めて生きているのである。だが現実には，多くの人間は個人愛にめぐり逢うことができない。それはなぜかといえば神に与えられた自らの使命を発見できないからである。

考えてもみよ。神に与えられた使命を発見しえずに，個人愛にめぐり逢えることができようはずがない。それはなぜかといえば神に与えられた人間の使命とは，自らの心に宿る想いを世に伝えてゆくことであり，その想いとは，他者に理屈で説明できるものではなく，そもそも想いが同じである者でなければ理解しえぬものだからである。

たれしも人は，自らの良心が照らしだした究極の理想的人物に共感し，自らの心に宿る想いを発見すれば，自らの生命それ自体に感動するであろう。

感動とは，もはやこれさえあれば他には何もいらぬ，という情念であり，それは自らの良心と完全に重なる究極の理想的人物の発見であり，つまりはもうひとりの自分の発見である。したがってまた自分と想いを同じくする者は，自分の良心が照らしだす究極の理想的人物が同じ人物であり，つまりはもうひとりの自分が自分と同じ人物のなのである。

たとえば織田信長に感動した者は，自分の想いが信長にあるのである。そのかぎり自分と人生を共有して生きてゆく者は，自らの想いが信長にある者でなければならないことになる。なぜなら自分と想いが同じでなければ，お互いに想いが通じないからである。となれば逆に，人生を共有して生きてはゆけないのである。

個人愛とは，言葉なしでもお互いの心が通じあえる自己と他者との関係である。それゆえにお互いに一心同体の同一人物となりうる存在であってはじめて，個人愛は成立しうるのである。

世の中には一心同体の同一人物となりうる他者が，ただひとりだけ存在する。まさにその他者は，自分にとってもうひとりの自分であり，自分自身の分身ともいえる存在である。

一般的に考えれば，お互いに一心同体の同一人物となりえる他者と出逢うことは，いわば奇跡ともいえることである。なぜなら六十億を超える人間のなかから，そのただひとりの他者を見いだすことは容易なことではないからである。だが神の意思を識れば，たれしも人は，容易に個人愛にめぐり逢うことができるのである。もはやそれは説明すべくもない。人間がこの世に登場してきた目的が神に与えられた使命を果たすことにある以上，たれしも人は，神に与えられた使命を発見し，その使命を果たしてゆけば，その使命を果たしてゆくプロセスのなかで必ず個人愛にめぐり逢うことができるのである。それはなぜかといえば自らの使命を果たしてゆく者は，自らの想いを自らの仕事を通じて世に伝えてゆく者であり，その想いはおのずと自らと想いを同じくする者に伝わるからである。

一般に自分と想いを同じくする者は，したがってまた神に与えられた使命を同じくする者は世に七人いる，といわれているが，そのなかのひとりに自分と一心同体の同一人物が存在する。

したがって人は，自らの使命を果たしてゆけば，必ず個人愛にめぐり逢うことができるのである。

人間にとって基本的には，自分以外の他者は容易にわかりあえぬ存在である。それはなぜかといえば，人それぞれに自らの心に宿る想いが異なるからである。それゆえ人は，他者に対してはただその存在をありのままに認め，是認すればよいのである。

人間は，自分以外の他の人びとに自分自身がよいとおもう生き方を強いるのではなく，各人が自分でよいとおもう生き方をお互いに許しあうことによってこそ，はるかに大きな利益をお互いに得ることができるのである（〔2〕『自由論』228頁）。

ありていにいえば，社会全体を見わたして自分自身の考え方や意見，感情を他者にわかってもらおう，などと考えてみても無駄なことである。自分と他者との間に異なる想いがあれば，人間の心は通いあうことはできないのである。だからといってこのことは，他者を排除せよ，という意味ではけっしてない。むしろその逆である。人それぞれに自らの想いが宿るかぎり，たとえ無意識にせよ人は自らの想いがどこにあるのか，懸命に探し求めて生きているのである。そしてまた神に与えられた使命があるかぎり，すべての人間には存在価値があるのである。たとえば自分を強烈に批判し，精神的に苦痛を与えてくる他者でさえも，自分に何かを学ばせてくれる存在なのである。それゆえ人は，他者に対してはそのありのままの姿を受け入れてゆくことが大事なのである。たとえお互いにわかりあえぬ関係であっても，お互いの存在を認めあうことによって自分の望む人生をつくりあげてゆく自由が生みだされるのであり，その自由があればこそ，たれしも人は，自分でよいとおもう生き方を貫いてゆけるのである。

ともあれたとえ世の中に，自分とわかりあえぬ見知らぬ他者が数多く存在するにせよ，否かえってそうした他者が数多く存在すればこそ，逆に自分と想いを同じくする者，すなわち自分と同じ使命に生きる者の姿をすぐに発見できるのである。

そしてまた自分と想いを異にする他者が数多く存在すればこそ，自分と一心同体の同一人物となれる他者にめぐり逢えた時，まさに感動ともいえる出逢いにめぐり逢えたことに心が震え，神に感謝の心を伝えることができるのである。

要するに大事なことは，人が求めてやまぬ個人愛にめぐり逢うためには，神に与えられた使命を発見することが前提となる，ということである。そのためには何よりもまず人は，自分自身の意識を高めてゆかねばならない。なぜならば自分の意識を高めてゆかなければ共感能力が高まらず，自らの良心が照らしだす究極の理想的人物を発見することができないからである。

一言でいえば神に与えられた使命を発見するためには，他者に対する共感能力をこそ高めてゆかねばならず，そのためにはまた自らの意識を高めてゆかなければならない。そしてまた自らの意識を高めてゆくためには，何よりもまず自らの人生に明確な目標を見いださなければならないのである。

人生の目標が明確に定まれば，その目標を達成するために利己心を存分に発揮し，最善の

努力を成すであろう。自らの人生に明確な目標を持つ者は，自分がどういう自分に成りたいのか，あるいはまた自分が何を成し遂げたいのか，ということを明確に意識して生きてゆける者であり，そのゆえに自らの人生の目標にむかって突きすすんでゆくプロセスのなかで自らの意識をおのずと高めてゆく者となってゆくのである。

人生の目標は常に変化する。そして目標が高まるごとに人間の意識は高まる。それはなぜかといえば目標が高まるということは，自分の理想が高まるということであり，つまりは自分の理想とする人物がより高い意識の持ち主に見定められたということであり，つまりはその高い意識の持ち主に共感しうるだけの意識が高まったということである，といえるからである。

そうして人生の目標が高まり意識が高まれば，自分の住む世界が変わってくる。自分の住む世界が変われば，出逢うべき人物が変わってくる。いいかえれば自分の意識が高まれば，自分がいままで住んでいた世界よりもはるかに高い意識を持つ人びとの存在する世界に生きる場を移すことになり，したがってまた自分よりも高い意識の持ち主と出逢い，自分の意識をさらに高めてゆくことができるのである。

それゆえ人生の目標が高まれば，人の意識は高まり，したがってまた共感能力も著しく高まって，自らの良心が照らしだす究極の理想的人物に共感し，自らの生命の発見＝自己の発見に辿り着いて，自らの想いをよみがえらせ，ついには神に与えられた使命を発見するに至るのである。

さらに重要なことは，神はあらかじめ自分と一心同体の同一人物となりうる他者を用意している，ということである。考えてみればそれは当然のことである。人間は皆，自分ひとりの力だけでは個人愛にめぐり逢うことはできない。なぜなら個人愛は，自分と同じ想いを有する他者があって，はじめて成立しうるからである。その他者とめぐり逢うためには，一言でいえば神に与えられた自らの使命を発見しなければならない。

神に与えられた使命が自らの愛をかぎりなく世に施してゆくことにあるとすれば，たれしも人は，まず個人愛にめぐり逢うことが決定的に重要なこととなる。神の無限の愛とは，すべての事実や存在をありのままに受け入れることにある。そして人は，神に与えられた使命を発見しうれば，自らの愛を自らの仕事を通して世に施して生きてゆこう，と意識して生きてゆけるようになる。

それゆえ神に与えられた使命を発見しえた者は，隣人を愛し，さらには人間それ自体を愛してゆけるようになる。

考えてもみよ。たれしも人は，人間それ自体を愛せてこそ，見知らぬ他者を受け入れて，愛の心を広げてゆけるようになるのである。隣人を愛し，人間それ自体を愛することなし

に，見知らぬ他者を受け入れることはできない。そしてまた人間それ自体を愛せずして，個人愛にめぐり逢うことはできないのである。

いいかえれば人が個人愛にめぐり逢うためには，自らの意識をこそ高めてゆかなければならない。自分と一心同体になりうる他者は，この世のどこかに存在し，そして必ずめぐり逢えるようになっている。だが意識が低く共感能力が低ければ，神がその他者との出逢いを与えてくれても，それと気づかず見過ごしてしまうであろう。

したがって人が個人愛とめぐり逢うためには，神に与えられた自らの使命を発見しなければならないが，そのためには共感能力の向上＝意識の向上こそが前提となるのである。そもそも自分と想いを同じくする人物がひとりしか存在しえぬとすれば，自分とその他者との意識はあらかじめ結びついているのである。

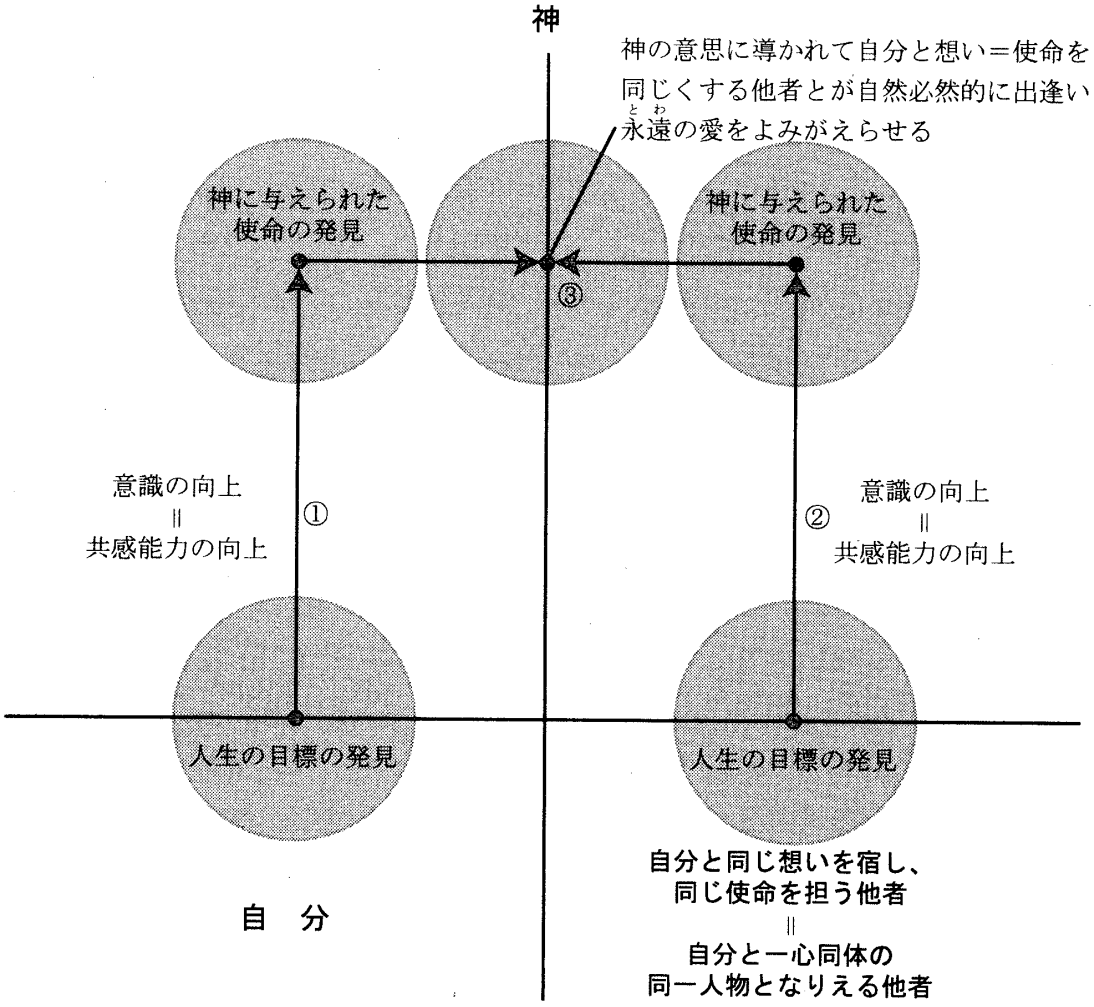
要するに自分の意識が高まれば，相手の意識も高まるようになっているのである。だからたとえば自分が人生の目標を高め，そしてまたそのプロセスのなかで感動の心を発見し，自らの使命を発見しえたとすれば，したがってまた自らの良心が照らしだす究極の理想的人物を発見しうるだけの意識を高めたとすれば，その他者もまた同じようなプロセスを経て，たとえその他者が自分とはまったく違う世界で生きていたにせよ，まったく同じ時期に自らの使命を発見し，ある一定の場所で出逢うようになっているのである〔図５を参照〕。

こうして人は，神に与えられた使命を果たしてゆくプロセスのなかで，自分と一心同体の同一人物となる他者と出逢い，つまりは個人愛にめぐり逢い，自らと同じ使命を果たしてゆくために，自らと同じ使命を担う人びとととともに，自らの愛を自らの仕事を通じて世に広く施してゆくようになるのである。

たれしも人は，人生の出発点においては，自己と他者との相対的な比較を通じて人生の目標を見いだし，その目標を達成するために利己心を存分に発揮してゆく。そのかぎり人間の幸福は，私的利益の増大に見いだされる。だが人生の目標を高めてゆき，そのプロセスのなかで自らの意識を高め共感能力を高めてゆくにつれ，必ず他者のなかに自らの良心が照らしだす究極の理想的人物を発見し，つまりは自らの想いを発見し，そしてまたその想いを自らの仕事を通じて世に伝えてゆくことに自らの使命を見いだすのである。まさにそれは，自らの感動の心の発見であり，自らの良心＝無限の愛の心の具体的な姿の発見である。そしてその時，人は自らの心に宿る神を発見しうるのであり，そのゆえに人生における絶対的価値規準を見いだして，神とともに生きてゆけるようになるのである。

いいかえれば感動の心の発見こそ神の発見であり，人間の幸福という概念の価値転換をもたらす。それによってたれしも人は，人間の幸福とは私的利益の増大にあるのではなく，自らの想いを世に広く高く伝えてゆくこと，すなわち自らの愛をかぎりなく世に伝えてゆくと

図5　個人愛との出逢い



① 人間は，自ら定めた人生の目標にむかって努力してゆくプロセスのなかで自らの意識を高め，飛躍的に共感能力を高めて，自らの想いを発見し，神に与えられた使命を発見する。そしてその使命を果たすために全力を尽くしてゆく。

② 世には，ただひとりだけ自分と完全に心を重ねあわすことのできる他者，いいかえれば一心同体となれる同一人物が存在する。その他者と自分とは，お互いが世に登場してきた最初から同じ意識，同じ想いによって結ばれている。そのために自分の意識が高まると，たとえその他者がどこにいようと（自分とはまったく異なる環境＝世界で生きていようと），即座に自分の意識がその他者に伝わって，おのずとその他者の意識も高まるのである。要するに自分と愛を重ねあえる他者とは，はじめから以心伝心の関係にある。

③ そうして自分が神に与えられた使命を果たしてゆく時，自分とその他者とは，おのずとお互いにとってもっともふさわしい時期に出逢いを与えられる。たとえば仕事を通じて自然に出逢ったり，お互いを知る共通の人物の仲介で出逢ってゆく。あるいはまた自分がその他者を発見して迎えにゆく，という出逢い方もある。そしてたとえその他者がまだ神に与えられた自らの使命を発見しえていないばあいでも，その他者が自分の意識についてこれるだけの共感能力を培っており，しかも同じ想いを有するがゆえに，お互いに出逢えば，ひとめでお互いの心が通じあい，永遠の愛がよみがえるのである。そうして個人愛にめぐり逢えば，お互いの異なる才能を発揮しつつ，同じ想い（感動）を自らの仕事を世に伝え，同時にまた自らの愛を世に施してゆく，という使命を果たしてゆけるのである。

いう精神的利益の増大にこそある，という意識を持って生きてゆけるようになるのである。まさにそれは，神と心をひとつにして生きる人生に他ならない。

したがってたれしも人は，自分の愛する他者と心を分かちあい，そしてまた自分と想いを同じくする者たちとともに自らの使命を果たしてゆく人生のなかに，つまり神のかぎりない愛を自らの仕事を通して世に施してゆく人生のなかに幸福を見いだしてゆけるのである〔図6を参照〕。

Ⅵ　おわりに

人は一体，何のために生きるのか。いうまでもなく人は，愛のために生きるのである。なぜなら人間の本質は無限の愛そのものであるからである。

したがって人間の幸福とは，自らの仕事を通して自らの愛を世にかぎりなく施して生きる，という人生のなかにこそ存在する。

いいかえれば人間が真の幸福を手にするためには，自らの愛に目覚めなければならず，そのためには自らの心のうちに宿る良心＝無限の愛の心を具体的な形で発見しなければならないのである。

本論文では，人間が幸福に辿り着くプロセスを人生の相対的価値規準から人生の絶対的価値規準への自然必然的な発展的転化というプロセスとしてとらえ，同時にまた人間の心の成長＝人間の意識の向上のプロセスを人生の目標から人生の目的への転化というプロセスとしてとらえて，明らかに人の人生には神が定めた人生の一般法則が存在することを J. S. ミルの政治経済学説に依拠して論証しえた。

注

(1)　人生の一般法則に関する具体的な考察に関しては，今後の研究課題とさせて頂きたい。本稿では，本論文で展開した人生の一般法則にしたがって，歴史上の人物（たとえば平清盛，織田信長，武田信玄，豊臣秀吉，石田三成，徳川家康，島津斉彬，西郷隆盛，ソクラテス，イエス・キリストなど）や神に与えられた才能を十分に引きだして活躍して世を去った人物たちの人生を参考資料として，ひとつの仮説を提唱した。なお前原〔5〕を参照されたし。

(2)　本論文における J. S. ミル『経済学原理』からの引用に関しては，参考文献に掲示した Mill〔1〕を引用した。たとえば（IIp. 217，②51頁）と表示したものは，左が Collected Works II の217ページからの，右が岩波文庫の末永茂喜訳の第二分冊51頁からの引用を示している。また Mill〔2〕，〔3〕，〔4〕からの引用に関しては，（　）内に邦訳のページ数を表示した。Mill〔1〕—〔4〕までの引用文中の〔　〕内の文章は，すべて引用者のものである。上記の引用文の邦訳に関しては，引用者が適宜改訳した。

人間の心	利　己　心	公　共　心	神の無限の愛の心
理想社会	利己心の体系 ‖ 資本主義社会	公共心の体系 ‖ 共同体社会	神の無限の愛の心の体系 ‖ 神の無限の愛の王国
個人	利己心の自由な発揮 ↓ 個性＝自己能力の向上 ↓ 人生の目標の達成 （自己の境遇改善＝生活水準の自己改善） ↓ 共感能力の向上 ↓ 人生の目標の向上 ↓ ハイレベルな人生の目標の達成 ↓ 人間的成長＝自己改善の促進 ↓ 自己愛 ↓ 社会愛	共感能力の向上 ↓ （自分本来の個性 ‖ 潜在的自己能力）の発見 ↓ 想いの発見＝感動の心の発見＝生命の発見 ↓ 自己の発見＝使命の発見→公共心の育成 ↓ 人生の目的の発見 ↓ 人間的完成を目指す自己の創造 ↓ 隣人愛＝人間愛 ↓ 個人愛とのめぐり逢い	幸福の価値観の大転換 ↓ 人生の相対的価値規準から絶対的価値規準に従った生き方への大転換 ↓ 神の無限の愛のメッセンジャーの大指導者（大天才）の登場 ↓ （大天才への天才たちの共感 天才への大衆の共感） ↓ 全宇宙の調和を実現しうる大勢の人間の登場 ↓ 国境を超えた人類愛 ↓ 世界愛 ↓ 宇宙愛
社会	諸個人の自由な利己心の発揮 ↓ 諸個人の個性＝自己能力の向上 ↓ 労働能率の向上→社会的生産力の向上 ↓ 資本蓄積の増進→資本主義社会の発展 ↓ 教育水準の向上 ↓ 諸個人の知的・道徳的水準の向上 ↓ 共感能力の質の社会的向上	自己の発見＝使命の発見 ↓ 公共心の発揮 ↓ 労働者の共同体組織の形成 ↓ （資本主義的企業 労働者の共同体組織）混合社会 ↓ 共同体組織の普及・発展 ↓ 人間の意識革命＝道徳革命	大天才の登場 ↓ 天才たちの登場 ↓ 神の無限の愛の心の世界的普及 ↓ 共同体組織の大発展 ↓ 世界共同体の形成 ↓ 世界の調和＝国際調和 ↓ 全宇宙の調和

人間の幸福	自己と理想的自己との一体感 ↓ 理想的人物の発見 ‖ 人生の目標の発見＝望みの発見 ↓ 理想的自己への接近 ↓ 自分の望む自己の創造 ‖ 新たなる自己の創造	自己と究極の理想的自己との一体感 ↓ 良心の照らしだす究極の理想的人物の発見 ‖ 想いの発見＝感動の心の発見 ↓ 究極の理想的自己への接近 ↓ 常識を超越した自己の創造	自己と神との一体感 ↓ 良心＝無限の愛の心の発見 ↓ 神の発見 ↓ 完全なる自己＝神への接近 ↓ 神と心をひとつにして生きる ‖ 神と心をひとつにする自己の創造
人間の仕事	人生の目標 ↓ 喜びの自己表現 ↓ 自らの喜びを仕事を通じて自己表現 ↓ 個性＝自己能力の向上 ↓ 物質的に豊かな社会	人生の目的＝人間的完成 ↓ 想い＝感動の心の自己表現 ↓ 自らの想いを仕事を通じて社会に伝達 ↓ 人格＝徳の向上 ↓ 社会の意識革命＝道徳革命 ↓ 精神的に豊かな社会	人生の目的＝神の目的 ↓ 神の無限の愛の心を 自らの仕事を通じて神に示す ↓ 神の無限の愛のメッセンジャー ＝天才たちの登場 ↓ 全宇宙の意識革命 ↓ 愛の絆で結ばれた社会
人間の使命	自分のために自らの生命を使用 ↓ 個性＝自己能力の使用 ↓ 個性＝自己能力の社会的還元	社会のために自らの生命を使用 ↓ （自分本来の個性 ‖ 潜在的自己能力）の使用 ↓ 才能の社会的還元	神のために自らの生命を使用 ↓ 神の無限の愛の心の宇宙的伝達 ↓ 神の無限の愛の王国の実現
人間の愛	自己愛 ↓ 家族愛	隣人愛＝人間愛 ↓ 個人愛 ‖ 一心同体の同一人物とのめぐり逢い ↓ 社会愛	個人愛 ↓ 無限の愛 ↓ 神の無限の愛のメッセンジャーたちの登場 ↓ 宇宙愛

参考文献

〔1〕Mill, J. S., Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy, 7th ed. 1871, in Collected Works of John Stuart Mill, Vol. II-III, Univ. of Toronto Press, London, Routledge & K. Paul, 1965.（末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫，第1-5分冊，1959-63年）

〔2〕Mill, J. S. On Liberty, 1859, in Collected Works, Vol. XVIV, 1977（早坂忠訳『自由論』中央公論社，1967年）

〔3〕Mill, J. S., Utilitarianism, 1861, in Collected Works, Vol. X, 1969.（伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社，1967年）

〔4〕Mill, J. S. Considerations on Representative Government, 1861, ed. by Harper & Brothers, New York Univ. Press, 1862.（山下重一訳『代議政治論』中央公論社，1967年）

〔5〕前原正美『J. S.，ミルの政治経済学』（白桃書房，1998年）

〔付記〕本論文は，石田鮎美氏との共同研究の成果である。